



Title	青年期および成人期の自立・自律性の検討―世代間差と対人依存欲求および自尊感情との相互関連性の観点から―
Author(s)	菱田, 陽子
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

青年期および成人期の自立・自律性の検討

—世代間差と対人依存欲求および自尊感情との相互関連性の観点から—

- ・ 青年期と成人期の比較による自立・自律性の検討
—適応的な依存と甘えの観点から—
- ・ 青年期および成人期における自立・自律性と対人依存
欲求および自尊感情との相互関連性に関する研究

大阪大学大学院

大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学

連合小児発達学研究科

小児発達学専攻

菱田 陽子

2023年9月 博士学位論文

青年期と成人期の比較による自立・自律性の検討

—適応的な依存と甘えの観点から—

菱田 陽子^{1)a)} 荒木友希子¹⁾

Consideration on independence/autonomy by comparison between adolescence and adulthood

—From the viewpoint of adaptive dependence and “amae”—

Yoko HISHIDA^{1)a)} and Yukiko ARAKI¹⁾

Abstract To define adaptive dependence in characteristics of independence and autonomy, we have reconstructed a scale that based on the previous autonomy scales (Hishida et al. 2010, 2011a and 2014). A result of a survey answered by 1300 subjects (661 males and 639 females; from teens to forties, average age of 35.69) showed that this scale was able to extract seven factors: “uniqueness”, “future prospect”, “amae”, “susceptibility to influence”, “excessive hard work”, “emotion control” and, “recognition of independence”. Further individual analysis of these seven factors revealed the presence of generational difference in five factors: “uniqueness”, “amae”, “susceptibility to influence”, “excessive hard work”, and “emotion control”. These data indicate that independence and autonomy are related to development and environment, as well as adaptive dependence, which is different from “amae”.

Keywords independence, autonomy, self-control, adaptive dependence, independence/autonomy scale

問題と目的

自立は他者から独立して主体性を持つという内容だけでなく、適度に他者に依存するという要素も含まれることが近年の研究で明らかになっている。自立に関連した概念に自律がある。そこで本研究では、相互に関わりあう自立と自律を一つの概念として定義し、適応的な依存の概念を含んだ自立・自律性に関する尺度の検討を目的とする。さらに適応的な依存を含む自立・自律性は、成熟性に関わると考えられるため、青年期、30代、40代の世代間の違いも検討する。

自立の概念については数多くの報告がある。たとえば、山田・宮下 (2007) は、日本人とアメリカ人の大学生を対象に自立と適応の関連について調査した。

その結果、アメリカ人は自立行動欲求と自己価値並びに知的能力に対する自信の間に有意な正の相関が見られ、日本人は有意な負の相関が見られた。これは、自立の様相は、文化社会によって異なることを示唆している。また、福島 (1998) は、「必要なときには他者に頼る、また心の支えを持つことで、青年は自己の自立をおこなっていた」と述べ、自立には、自分のことは自分でできる独り立ちに加えて、依存性の要素が含まれることを主張した。依存は自立や自律と対立的なものではなく、自立や自律の中に適応的な依存が含まれていると言える。

自立に関連した自律の概念については、例えば、Muraven, Rosman & Gagné (2007) は、自主性に向かう autonomy と、制御を意味する self-control の二つの意味をもつと定義した。また、池見・杉田 (1990) は、自律 (self-control) を自己実現に向かう自己制御と定義した。大野 (1993) は、自律性を自己の意志力によって自己の欲求をコントロールする能力と考え、具体的には、ものごとをやり抜く力、多少のことでは

¹⁾ 大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所

Osaka University United Graduate School of Child Development

a) E-mail: yhishida@gmail.com

へこたれない意志の強さ、忍耐強さなどを含むと定義した。神谷 (1997) は、autonomy と independence の使い方から自立と自律の関係を明らかにしようとしたが、文献によって使われ方が多様であったと報告している。

自立と自律の関係性について、その違いを明らかにしているものはないが、井上 (1995) は、自律性を「自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚であり、それを背景にして他者との適切な対人距離を保つことができる特性」と考え、「必要なときには、親と頼ったり頼られたりする」という適応的な依存項目を含んだ自律性尺度を用いて検討を行った。その結果、親に対する依存と関わる葛藤を保持することが自律性の発達に関連し、自律性と依存が関わりあっていることを明らかにした。さらに、このような自律性を獲得していくことで自立が達成されると報告した。

適応的な依存については、自律性との関係について、竹澤・小玉 (2004, 2006, 2007a,b, 2008, 2009) が、実証的な研究結果を報告している。竹澤・小玉 (2007b) は、対人的依存性の適応的側面に注目し、特に青年期におけるその適応的機能について実証的に検討した。結果として、「頼りたいときに頼ることのできる人」は依存時に、自分の成長に重きをおいて頼るか否かを判断し、高い自己価値を有し、親密でありのままの自分を出した対人関係の持ち方をしていた。適応的な依存のあり方については、自律性を保持した依存の場合、依存後、自己成長感が高まり、相手にゆだねる他者依拠的な依存の場合、成長阻害感が高まっていた。検討の結果、依存と自律は対立的なものではなく、適応的な依存の表出が自己成長感を介することにより自律性を促す可能性を明らかにした。

以上をふまえ、本研究では、自立性を自分らしい自主性、自律性を自己実現に向かう自己制御としてそれぞれ定義する。これらの定義に基づき、相互に関係しあう自立・自律性とは、親・大人から自立し、親、家族、教師、友人などの他者から行き過ぎない支援を頼る適応的な依存を有し、個性やユニークさとして示される個人の独自性を意味するものとする。

自立・自律性と適応的な依存の関係を明らかにすることは、青年期における適切な支援の理解に役立つと思われる。自立や自律性は、青年期の重要な発達課題である。青年期は人生の中でも特に心理的に不安定になりやすく、どのように自律性を獲得しつつ自立して

いくかによってその後の心の健康のあり方が変わってくる。たとえば、自己決定と責任に関する自立の意識が強すぎるとうつにつながる傾向が示唆されている (山田, 2011)。自己決定と責任に関する自立の意識が強すぎると、支援の必要な時に援助要請行動をとることができないため、適応的な依存ができず、頑張り過ぎる心性と関連していると考えられる。

適応的な依存の概念を包括した自立・自律性の尺度には、菱田他 (菱田・加藤・金子, 2010; 菱田・野口・金子, 2011; 菱田・野口, 2014) による、作成や改定をおこなったものがある。本研究では、これらの研究結果の尺度構成因子について、再検討することを第一の目的とする。以下に、これまでの研究について、尺度名の不一致を含め、概観する。

まず、尺度名の不一致について、菱田他 (菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014) および金子・菱田 (2011) は、菱田他 (2010) が作成した、適応的な依存を含む自立性尺度を用いて、計 4 回、青年期である大学生を対象として自立・自律性の因子構造を検討している。

検討当初から、自立性と自律性を分けるのではなく、相互に関係しあう一つの心性と考え、自立・自律性を測る尺度の作成を試みている。しかし、菱田他 (2010) では、自律性についての検討が不十分だったため、「自立性尺度」とし、菱田他 (2011)、で、適応的な依存と思われる項目を加えて分析しているが、適応的な依存因子の α 係数が低かったこともあり、尺度名は、「自立性尺度」としている。菱田・野口 (2014) の段階で、甘え、適応的な依存、自律について再検討を重ね、尺度名を「自立・自律性尺度」としている。本研究では、先に示した、自立・自律性の概念を精査し、尺度名は「自立・自律性」を使用する。

以下に各研究の概観を示す。

菱田他 (2010) は、高坂・戸田 (2005) の心理的自立に関する尺度に、江口 (1966)、高橋 (1968)、福島・渡辺 (1995)、福島 (1997, 1998, 1999a,b) らの依存性の概念と、個人それぞれがもつ個性・独自性を加味した尺度を作成している。高坂・戸田 (2006) の心理的自立尺度 15 項目 (将来志向 3, 適切な対人関係 4, 価値判断実行 2, 責任 3, 自己統制 3) に、菱田らの認知的、情緒的自立および自己統制、独自性等に関する 29 項目を加えた計 44 項目 (4 件法) の尺度で、自主性に向かう自立・自律性 7 側面 (①価値判断・実行, ②認知的自立, ③情緒的自立, ④自己統制感, ⑤独自

性, ⑥適切な対人関係, ⑦将来展望) を仮定し, 検討した。因子分析の結果, 27 項目について, ①将来展望, ②独自性, ③自立の認識, ④対人協調, ⑤感情統制, ⑥影響受けやすさの 6 因子を抽出した。しかし, 適応的な依存に関する因子は抽出されなかった。

この結果をふまえ, 菱田他 (2011) では, 菱田他 (2010) の 27 項目に, 適応的な依存を内容とする 6 項目と, 影響受けやすさを内容とする 3 項目を加え, 計 36 項目 (4 件法) の尺度として再検討をおこなった。因子分析の結果, 32 項目について最終解が得られ, ①将来展望, ②影響受けやすさ, ③独自性, ④感情統制, ⑤自立の認識, ⑥対人協調, ⑦他者依存の 7 因子が抽出された。しかし, 適応的な依存を現わしている「他者依存」と名付けた因子は, α 係数が低かった。

そこで, 菱田・野口 (2014) では, 菱田他 (2011) の 36 項目に, 土居 (1971) の甘えの概念を導入し, 新たに, 適応的な依存を内容とする 10 項目と, 「甘え (不適応的な依存)」を内容とする 8 項目を加え, 計 54 項目 (4 件法) で, 甘えと適応的な依存の抽出を試みた。因子分析の結果, 38 項目について最終解が得られ, ①独自性, ②将来展望, ③影響受けやすさ, ④自立認識, ⑤自立こだわり, ⑥対人協調, ⑦やる気なさ, ⑧感情非統制, の 8 因子を抽出した。しかし, 対人協調因子項目を検討したところ, 自立・自律性とは異質な意味を持つ内容が含まれていた。また, 以下の 2 因子について, ⑤自立こだわりと名付けた因子は, 適応的な依存の内容ではなく, 自立にこだわった過剰な頑張りの内容であり, ⑦やる気なさは, 甘えの内容であった。この尺度に, 適応的な依存項目と甘え (不適応的な依存) 項目を加えたのは, 「甘え」 (不適応的な依存) 因子と「適応的な依存」因子が分かれて抽出されることにより, 「適応的な依存」因子の内容を明らかに示すことができると考えたことによる。

ここで用いた甘えの概念は, 土居 (1971) によるものと, 土居 (1971) の概念を用いて, 谷 (1999) によって明らかにされた甘えの構造を参考にしている。土居 (1971) は, 健康で素直な甘えを提示した。谷 (1999) は, この概念に基づき, 質問紙を用いた因子分析によって, 青年期の甘えの構造を調べた。その結果, 「困ったことがあるとき人にすがりたいと思う」, 「悲しいことがあったときに人に慰められたいと思う」, 「悩みがあると人に相談したいと思う」などを内容とする因子を土居 (1971) の, 健康で素直な甘えの概念に従い, 「直接的甘え」因子と考えた。土居 (1971)

の, 「健康で素直な甘え」因子, 谷 (1999) の「直接的甘え」因子は, 本研究で考えている, 必要な時は適切な人に頼る, 適応的な依存と同質である。しかし, 谷 (1999) の「直接的甘え」因子には, 菱田・野口 (2014) の不適応的な依存項目も含まれており, 適応的な依存と甘えは分かれて抽出されていない。

金子・菱田 (2011) は, 菱田他 (2011) の尺度を用いて検討をおこなった結果, 27 項目について最終解が得られ, ①将来展望, ②影響受けやすさ, ③対人協調, ④自立認識, ⑤独自性, ⑥感情統制, ⑦非依存の 7 因子を抽出した。「非依存」と名付けた因子は, 過剰な頑張りを意味するものだった。

以上菱田らの 3 回の分析結果並びに金子・菱田 (2011) の因子分析では, 6 因子から 8 因子構造が示され, いずれも単純構造を示し, 各因子の項目数も極端に異なる因子構造を示した。菱田他 (菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014) 並びに金子・菱田 (2011) 全てで, ①独自性, ②将来展望, ③影響受けやすさ, ④自立認識, ⑤感情統制 (感情非統制) の 5 因子は抽出されたが, 適応的な依存に関しては, 金子・菱田 (2011) 並びに菱田・野口 (2014) でのみ, 適応的な依存とは反対の過剰な頑張りを内容とした因子が抽出され, さらに課題が示された。

以上をふまえて, 本研究では, 自立・自律性の概念について, 菱田らの過去の研究の定義を明確化するため, 自立性, 自律性, 適応的な依存と甘えを検討し, 先に記したように概念の再定義をおこない, その定義に即した尺度構成を試みる。具体的には, 自立・自律性の中心概念は, 親・大人からの自立, 適応的な依存 (親, 家族, 教師, 友人などの他者から行き過ぎない支援を頼る), および, 個人の独自性 (個性・ユニークさ) の 3 要素から構成する。下位尺度は, 菱田・野口 (2014) の 8 下位尺度から, 自立・自律性とは異質な意味を持つ内容が含まれていた, 「対人協調」因子を抜き, 以下の 7 因子を想定した。具体的には, 自立に関わる因子として, 「将来展望」 (自分の将来について考えをもっている), 「影響受けやすさ」 (周りの影響を受けやすく, 人の意見に流されやすい), 「自立認識」 (どうすれば, 家からの自立ができるか知っている), および, 「感情統制」 (悲しみ, 怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる) の 4 つの因子を想定した。適応的な依存に関わる因子として, 「過剰な頑張りに」 (困っても「助けて」と言いたくない, どうにもならなくても助けを求められない), および「甘

え」(人に頼って楽に過ごしたい)の2つの因子を想定した。独自性に関わる因子として、「独自性」(他人と違っていても、自分の考え方が大切、自分なりの考え方で生きたい)を想定した。

なお、本研究のもととなる菱田・野口(2014)の尺度に関して、併存的妥当性は、菱田他(2010)の自立性尺度作成時に、伊藤(1995)の個人志向性・社会志尺度を用いて併存的妥当性を確認している。菱田他(菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014)の3回の調査の際に、適応的な依存と考えられる項目と、甘えと考えられる項目のみ見直しをしているため、本研究では、併存的妥当性の確認はおこなわないこととする。

次に、本研究の第二の目的として、青年期の自立・自律性を明らかにするため、適応的な依存と関わる過剰な頑張り注目しつつ、成人期の自立・自律性との違いを検討する。青年期と成人期の自立・自律性の世代差に関して、これまでいくつか報告されている。たとえば、古市(1984)は、青年・成人・老人の3群を対象に、自立性を含む心理的・社会的成熟を検討した。その結果、青年は親からの自立や人格的成熟といった内面的な成熟を重視し、成人は主体性確立や礼儀作法・現実順応といった社会的慣習への尊重、順応を重視するとして、自立・自律性の世代差を報告している。

藤原・伊藤(2010)は、自律性を含む西田(2000)の心理的 Well-Beings 尺度を用いて、大学生・未婚の社会人・幼児をもつ母親の3群を対象に、青年期後期から子育て期における女性の自律性を含む心理健康における母娘関係のあり方について検討した。その結果、自律性は、年齢が上がるにつれて上昇し、特に青年期と成人期以降で差が開き、学生から社会人或いは親となることによって自律性が高まっていた。藤原・伊藤(2010)の自律性とは、西田(2000)の下位尺度である自律性と同じく、「自分の生き方を考えたり、何か重要な判断をするとき、人の意見に左右されない」を内容としており、菱田他(菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014)の独自性因子と類似している。これらの報告から自立・自律性に世代間の差があることが明らかにされているが、菱田他(菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014)の自立・自律性の特性の一部に関する世代間の差を示しているにすぎない。

本研究の自立・自律性に関する世代間の差については、青年は成人より発達が未熟であると考えられるため、青年は、成人と比べ、「独自性」、「将来展望」、「自

立認識」、「感情統制」因子に関してはより低く、「甘え」因子、「影響受けやすさ」因子に関してはより高いことが予測される。本研究で注目している、適応的な依存と関わる過剰な頑張りについては、青年は、頑張ることを肯定的に教育されていると考えられるため、成人より高いことが予測される。

方 法

調査対象者および手続き 対象は、47都道府県の10代38人, 20代308人, 30代424人, および40代530人の1,300人(男性661人, 女性639人, 平均年齢35.69歳)とした。データ収集は、マイボイスコム株式会社を通じたWeb調査により実施した。調査実施期間は、2017年2月17日(金)18時にアンケート案内のメールを配信し、最終回答者の回答終了時刻は2月19日(日)12時28分であった。Webページ画面に「あなたご自身についてのアンケート」として、質問票と解答欄を表示し、対象者に回答を送信してもらう方法で実施された。平均回答時間は16分、最短時間は3分、最長時間は23時間40分であった。回答時間が長い回答者については、アンケート画面を開いたままの離席などが考えられた。実施にあたっては質問票に以下の教示文を文書で提示した。「本調査は学術研究の一環としておこなわれるものであり、グローバル化する現代社会に生きる若者や成人の価値と規範に関わる意識について調べることを目的としています。回答者個人のことを知るためではなく、社会の全体的傾向を把握するために実施するもので、それぞれの回答は、あくまでも集計して使用いたします。また回答は完全に匿名となっています。なお、どうしてもお答えになりたくない項目については、回答せずに先に進めるようになっていきますので、お答えにならなくてもかまいません。調査へのご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。」回答はマイボイスコム株式会社において集計され、個人情報特定されない集計データとして研究者に渡された。

倫理的配慮については、金沢大学人間社会学域「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会において、承認番号2016-10として、承認されている。

調査内容 菱田・野口(2014)が作成した尺度から、「対人協調」因子項目を除外した35項目、7因子構造(「独自性」、「将来展望」、「影響受けやすさ」、「自立の認識」、「自立こだわり」、「やる気なさ」、「感情統制」)を仮定した尺度を用いた。これらに加えて、妥当性尺

度項目として、先の調査で作成した不適切回答点検のための7項目 (Table 1) を加え、合計 42 項目で実施した。但し、本研究のために調査した質問紙は、本研究対象質問 42 項目と本研究以外の研究対象質問 36 項目を含め合計 78 項目の質問紙で調査し、不適切回答の点検は、78 項目を対象におこなった。

Table 1 Validation check items

不一致確認項目	毎日がとても楽しい・憂鬱になることが多い 人を疑うことは殆どない・他人を信じられない テレビは殆ど見ない・テレビをよく見る
虚偽項目	欲しいものが手に入らなかったことはない 風邪をひいたことはない 思い悩んだことはない 夢をみたことはない
社会的望ましき	うそをついたことはない 横断歩道でないところを横断したことがない 世の中の規則はすべて守っている

※ Discrepancy check items (responses to the parallel items must match)

なお、本研究対象質問と対象外質問は分けて提示しているため、質問の回答には影響を与えていない。

教示は「次の項目はどの程度あてはまりますか」とし、評定はいずれも「1. あてはまる, 2. 少しあてはまる, 3. あまりあてはまらない, 4. あてはまらない」の4段階とした。7つの逆転項目を設けているが、内的整合性を分析する際に、逆転項目の処理をしている。逆転項目は、Table 2 で、※印で示した6項目と除外項目1項目である。

結 果

回答の有効性

回答が歪められる判断の基準として、①明らかに回答速度が速すぎる、②連続して同一の評定値を多く示している、③明らかに一致しなければならない項目に対する矛盾回答、④通常は明らかに認められる或いは認められない事柄に対する回答、⑤いわゆる社会的望ましき要因の5つを設けた。その結果、①3分以内で回答した高速回答者2名、②78項目中、回答1(あてはまる)、回答2(少しあてはまる)、回答3(あまりあてはまらない)、回答4(あてはまらない)をそれぞれ連続50回以上回答した42名、③不一致項目3組全て不一致だった1名、④虚偽項目4項目と⑤社会的望ましき項目7項目中6項目以上「あてはまる」を選んだ3名、計48名を除外した。6項目以上を分岐点にすることについては、共同研究者間で協議し決定した。

以上、回答の得られた1,300名を対象に基本的な回答の有効性を確認した。その結果、1,252名(10代36名:平均18.6歳,標準偏差.49,20代290名:平均24.3歳,標準偏差2.93,30代407名:平均34.3歳,標準偏差2.97,40代519名:平均44.8歳,標準偏差2.84)を分析対象とした。

集計データの解析にはIBM SPSS Statistics 25, IBM SPSS Amos 25を用いた。

自立・自律性尺度の検討

自立・自律性の因子構造と信頼性の検討 ここで用いた自立・自律性尺度の因子構造については、菱田他(菱田他,2010,2011;菱田・野口,2014)で使用された分析同様に、最尤法による因子抽出,プロマックス法による軸の回転によるものである。この自立・自律性尺度は菱田他(菱田他,2010,2011;菱田・野口,2014)に一部変更を加えたものであり、菱田他(菱田他,2010,2011;菱田・野口,2014)と同質の尺度である。

本研究では、再検討した項目35項目で、分析の対象となった有効標本数1,252名の回答に対して項目分析をおこなった結果、床効果および天井効果がみられた項目はなかった。尺度のすべての項目を用いて探索的因子分析をおこなった。負荷量.40以下の5項目と2個の因子に.35以上の負荷量を示した1項目を削除し、29項目で、再度因子分析した結果、「甘え」因子と「過剰な頑張り(適応的な依存)」因子が分かれて抽出され、作成時に予測した7因子構造となった。結果をTable 2に示した。自立・自律性に関する下位尺度について、Chronbachの α 係数を求めたところ、「独自性」.78(6),「将来展望」.78(4),「甘え」.76(5),「影響受けやすさ」.80(4),「過剰な頑張り(適応的な依存)」.64(3),「感情統制」.63(4),「自立認識」.75(3)であった。なお()内の数字は当該の項目数を示す。Table 3には各下位尺度得点の項目数, α 係数,範囲,平均値と標準偏差を示した。

本データの因子分析で明らかになった因子構造が妥当かどうかを再度検証するため、因子を潜在変数とし、項目を観測変数として、共分散構造分析(構造方程式モデリングを作成)による確認的因子分析(検証的因子分析)をおこなった。結果をFigure 1に示した。因子間相関,因子負荷量は、因子分析と同じ傾向を示した。適合度は、中程度であった($p = .000, GFI = .859, AGFI = .831, CFI =$

Table 2 Results of Factor analysis (Independence / autonomy)

	Factor	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
I 独自性								
33.	他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ	.835	-.081	-.072	.050	-.014	.013	-.097
34.	他人の考え方ではなく、自分なりに考えて、生きていきたい	.772	-.042	-.046	-.015	.030	-.031	.004
21.	自分ならではの好みや考え方がある	.551	-.032	.139	-.070	-.056	.006	.011
37.	自分なりの価値判断の基準を持っている	.547	.151	.057	-.170	-.009	.011	.068
19.	多少トラブルがあっても、人と違った自分の考え方を大切にすべきだと思う	.454	.073	.021	-.055	.145	-.012	-.038
7.	これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている	.391	.200	.060	.071	-.082	.076	-.021
II 将来展望								
4.	自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている	.102	.780	-.068	.030	.007	-.037	-.087
15.	将来に対する見通しや考えをもって生活している	.015	.742	.078	.068	.046	.058	.002
32.	将来の目標がなかなか定まらない ※	.184	-.728	.138	.105	.160	.035	.121
25.	自分の将来のことをよく考えている	.084	.581	-.050	.044	.006	-.121	.176
III 甘え								
22.	何かに挑戦するとか、困難を克服することを考えるより、人に頼って楽に過ごしたい	-.118	-.115	.739	-.078	.105	.021	-.027
16.	わずらわしいことは自分で考えず、人に頼りながら生きていきたい	-.124	.041	.738	-.011	.024	.025	-.049
38.	世話をやいてくれて、私を楽にしてくれる人が欲しい	.132	-.056	.587	-.011	-.087	-.082	.044
11.	面倒だと思うことは、自分でやるより人にやって欲しいと思うことが多い	.153	-.112	.538	.120	-.205	-.045	.004
5.	掃除や洗濯など自分でできるものでも、誰かにやって欲しいと思う	.105	.039	.503	.009	-.143	.018	-.076
IV 影響受けやすさ								
8.	簡単に周囲の人の影響を受けてしまう	.034	.020	-.037	.882	-.064	-.067	-.021
10.	周りの人の意見に流されやすい	-.050	-.009	-.038	.816	-.039	-.022	-.009
1.	相手の意見にすぐ納得してしまう	-.070	.027	.036	.638	-.007	.071	.036
23.	友だちと議論していると、相手の方が正しいと思ってしまう	-.136	.051	.214	.361	.235	.071	-.016
V 過剰な頑張り								
40.	どんなに困った状態になっても、私は、誰かに「助けて」と言いたくない ※	-.009	-.032	-.118	-.071	.703	-.024	-.059
35.	自分ではどうにもならないのに、他人に助けを求められない ※	.149	-.175	-.145	.078	.606	-.040	.000
20.	どんなに困っている時でも、人に助けて欲しいと言うのは、努力が足りないように思う ※	-.083	.114	.046	-.048	.554	-.009	.011
VI 感情統制								
17.	悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	.037	.085	.204	-.009	.032	.667	.032
39.	状況にあわせて感情をコントロールすることができない ※	.056	.131	.194	.027	.228	-.555	-.034
27.	つい感情にまかせて行動してしまう ※	.077	.110	.190	.043	.089	-.540	.126
31.	いつも落ち着いて行動できる	.190	.070	-.053	.096	.177	.490	.000
VII 自立認識								
26.	家から自立するには何が大切かを知っている	-.080	-.046	-.056	-.003	-.037	-.074	1.091
3.	一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている	.114	.117	-.028	.012	-.036	.101	.372
14.	精神的に自立するには何が必要かを知っている	.043	.253	.016	-.013	.066	.193	.367
	Contribution ratio(%)	9.668	11.900	8.453	6.421	4.469	3.329	2.902
	Cumulative contribution ratio(%)	9.668	21.568	30.021	36.442	40.912	44.241	47.143
	Factor correlation	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7
	F1 独自性							
	F2 将来展望	.281						
	F3 甘え	.086	-.024					
	F4 影響受けやすさ	-.136	.007	.483				
	F5 過剰な頑張り	.180	.109	.190	.229			
	F6 感情統制	.239	.418	-.233	-.230	-.045		
	F7 自立認識	.476	.566	.007	-.011	.237	.369	

※は逆転項目

.807, $RMSEA = .070$).

青年期と成人期の自立・自律性下位領域による比較

本研究では、特に、適応的な依存と甘えに注目しつつ、自立・自律性についての各因子(下位尺度)毎に、

青年期、30代、40代の各群間に差があるかどうかを検討した。具体的には、各因子得点を従属変数、青年期、30代、40代を独立変数として、一元配置分散分析をおこない比較した。その結果、5因子(「独自

Table 3 Statistical analysis of subscales

	項目数	α 係数	範囲	平均 (SD)
I 独自性	6	.782	19	12.06(2.84)
II 将来展望	4	.775	13	10.23(2.63)
III 甘え	5	.762	16	12.28(2.94)
IV 影響受けやすさ	4	.799	13	10.85(2.40)
V 過剰な頑張り	3	.637	10	6.95(1.83)
VI 感情統制	4	.628	12	9.56(2.20)
VII 自立認識	3	.753	10	6.80(2.02)

Number of items, α coefficient, range of subscale score and average value of subscale with SD (standard deviation; in parenthesis) are given to uniqueness (I), future prospect (II), "amae" (III), susceptibility to influence (IV), excessive hard work (V), emotion control (VI) and recognition of independence (VII).

性」 $F(2, 1249) = 3.507, p < .05, \eta_p^2 = .006$, 「甘え」 $F(2, 1249) = 9.890, p < .01, \eta_p^2 = .016$, 「影響受けやすさ」 $F(2, 1249) = 16.080, p < .01, \eta_p^2 = .025$, 「過剰な頑張り」 $F(2, 1249) = 4.194, p < .05, \eta_p^2 = .007$, 「感情統制」 $F(2, 1249) = 4.783, p < .05, \eta_p^2 = .008$ で、有意な差がみられた。結果を Figure 2 に示した。「独自性」は、30 代のほうが、青年より有意に高く、「甘え」は、40 代のほうが、青年より有意に高く、「影響受けやすさ」は、30 代、40 代のほうが、青年より有意に高く、「過剰な頑張り」は、30 代のほうが、青年より有意に高く、「感情統制」は、青年、30 代のほうが、40 代より有意に高かった。

考 察

本研究の第一の目的は、「適応的な依存」因子を含む自立・自律性尺度を構成する因子の再検討をすることであった。因子分析の結果、甘えと過剰な頑張りはそれぞれ独立した因子として抽出された。しかし、適応的な依存を内容とする因子を仮定したが、分析の結果は、「どんなに困っても助けて、と言いたくない」、「自分でどうにもならないのに、他人に助けを求められない」、「どんなに困っている時でも、助けて欲しい」というのは、努力が足りないように思う」に対する因子負荷量は全て正の数字を示し、過剰な頑張りを内容としていた。適応的な依存は、依存し過ぎず、しかし、心が疲弊するほど頑張り過ぎず、適切な人に適応的に依存することを意味している。このようなバランスには、成熟性が必要と考えられるため、世代を広げて、再度検討する必要がある。

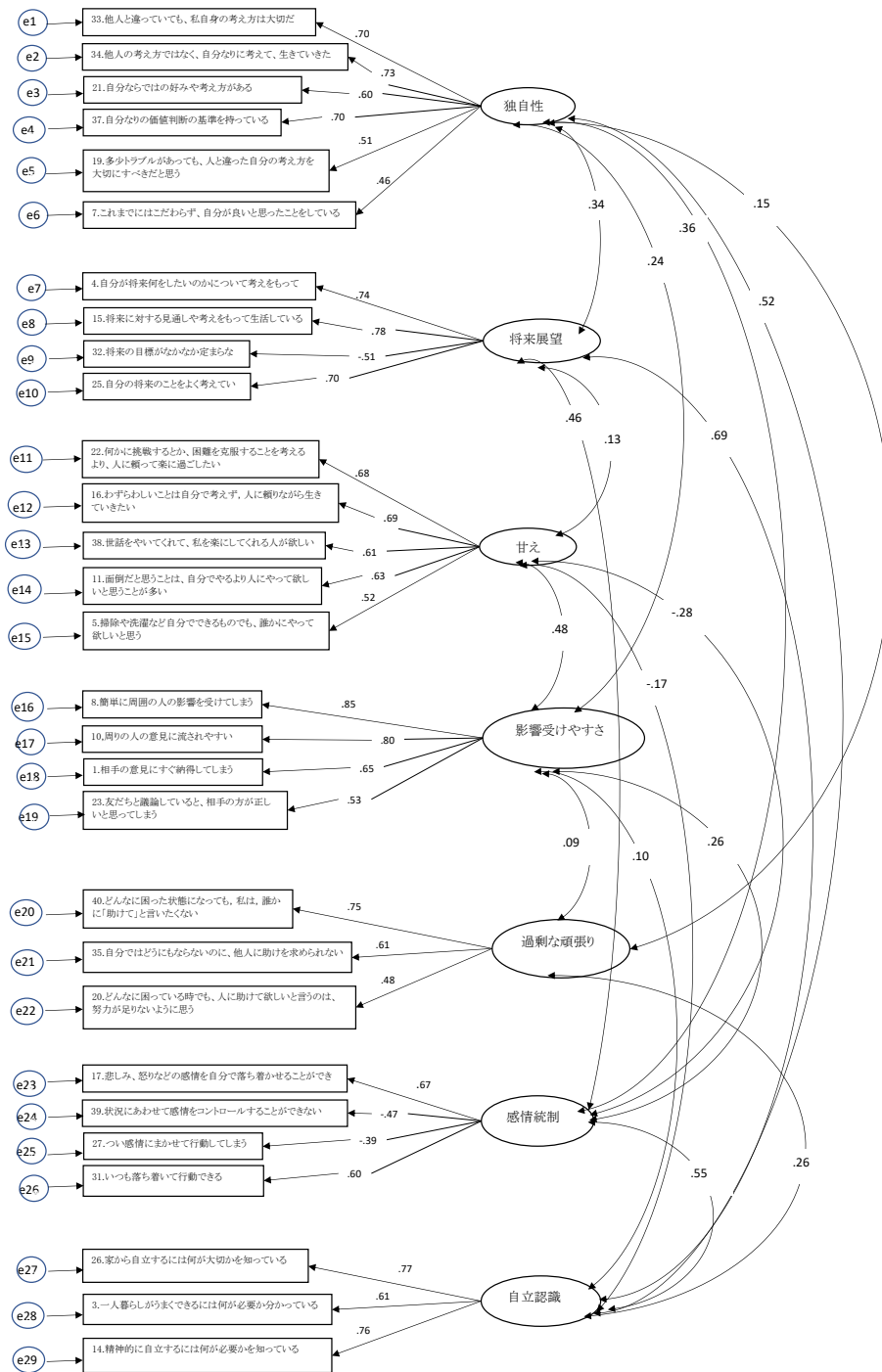
Table 2 の因子分析における因子間相関を見ると、「独自性」「自立認識」間 ($r = .476$)、「自立認識」「将

来展望」間 ($r = .566$)、「将来展望」「感情統制」間 ($r = .418$)、「甘え」「影響受けやすさ」間 ($r = .483$)でそれぞれ、あまり強くはないが相関している。それぞれ、因子項目の内容により、示された関係性は理解し得るものであり、妥当と考えられる。「独自性」「自立認識」間、「自立認識」「将来展望」間については、自分なりの考えがあるという点で相関していることが理解できる。「将来展望」「感情統制」間については、感情的にならない、冷静に考えるという点で相関していることが理解できる。「甘え」「影響受けやすさ」間については、自分の考えが弱く、人に頼るという点で相関していることが理解できる。

自立・自律性に関する下位尺度について、内的整合性を示す Chronbach の α 係数は、.6 台の下位尺度が 2 つ存在したが、他は、.7 以上あり、研究利用に耐える値となった。以上の結果より、研究利用に耐える妥当性および信頼性が確認できたといえる。加えて、菱田他 (菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014) の尺度、金子・菱田 (2011) の尺度、および、本研究における尺度の因子構造が安定しており、再現性があることから、この尺度は頑健性があると考えられる。但し、確認的因子分析結果の適合度は中程度であり、因子分析の結果と探索的なパス図は同じではなかった。しかしながら、因子相関、因子負荷量は、因子分析と同程度の数字であることから、因子の仮説の妥当性はある程度確認できたといえる。

第二の目的として、青年期の自立・自律性を明らかにするため、青年期と成人期の自立・自律性の違いを検討した。青年、成人 30 代、成人 40 代の群に分けて、自立・自律性の適応的な依存に注目し、分析をおこなった。本研究で、青年に成人を加えることにより、「適応的な依存」因子において、成人は適応的な依存を示し、青年は過剰な頑張りを示すと予測した。しかし、30 代は青年より頑張る内容を示し、菱田らが考えている自立・自律性の適応的な依存については、世代が上がるにつれて獲得されるというような単純な発達を示さないことが示唆された。また、過剰な頑張りについての項目を、全て逆転項目にしたが、項目の検討をする必要がある。

各因子の世代間の違いについて、青年は、成人と比べ、「独自性」因子、「将来展望」、「自立認識」、「感情統制」因子に関してはより低く、「甘え」因子、「影響受けやすさ」因子、「過剰な頑張り」因子に関してはより高いと予測したが、結果で示したように、予測と



($\chi^2=2583.326$, $p=.000$, $GFI=.859$, $AGFI=.831$, $CFI=.807$, $RMSEA=.070$)

Figure 1 Diagram by structural equation modeling with 29 observed variables.

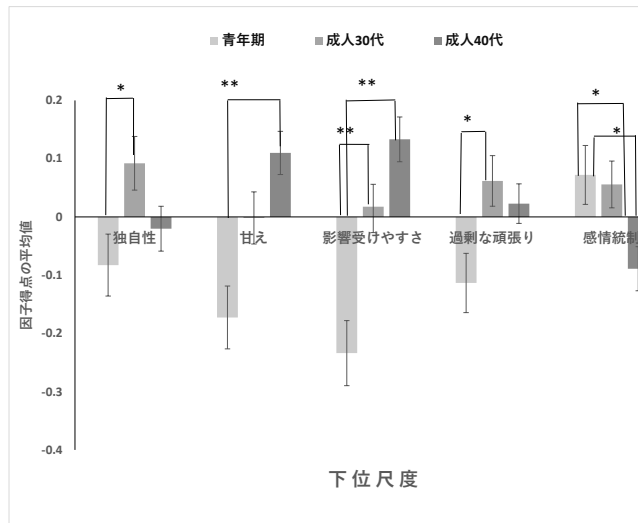


Figure 2 Mean factor scores of the independence/autonomy subscale by age group. * $p < .05$, ** $p < .01$, $N = 1252$ (adolescence = 326, adult30s = 407, adult40s = 519)

は異なっていた。以下に、青年期と成人で異なっていた5因子(独自性、甘え、影響受けやすさ、過剰な頑張る、感情統制)について、考察する。

「独自性」因子(他人と違って自分の考え方でいきたい)について、青年は成人より低いという予測は支持された。しかし、青年と40代についての差は有意ではなかった。有意差については、吉田(2019)が述べているように、有意差のみで考察するのではなく、経験的に意味あると考えることも重要である。藤原・伊藤(2010)が「自律性は、年齢が上がるにつれて上昇する」と述べており、年齢が上がるに従い、他人とは違って、自分の考え方で生きていることが明らかになった。

「甘え」因子(人に頼って楽に過ごしたい)、「影響受けやすさ」因子(周りの影響を受けやすく、人の意見に流されやすい)、「過剰な頑張る」因子(困っても「助けて」と言いたくない、どうしてもならなくても助けを求められない)について、青年は成人より高いという予測は支持されなかった。差が有意であるかどうかについては、Figure 2の通りである。

甘えと影響受けやすさについては、推測の域を出ないものの、30代・40代成人の生きる環境が青年より厳しく、青年より仕事上で責任も増え、社会の要求も大きくなることから、頑張る続けることに疲弊し、時には、人に頼って楽に過ごしたい、世話をやいてくれ

て楽にしてくれる人が欲しいという甘えが高くなることも考えられる。また、仕事上の人間関係で相手に合わせることも必要となることから、周囲の影響を受け入れつつ順応し、適応しつつ生きていることが示唆された。この気持ちの依存行動が適切になされれば、本研究で考えてきた、適応的な依存を含む自立・自律性が成立するとも考えられる。これを明らかにするには、今後、依存欲求を適切に行動として表しているかどうかを聞く必要もある。一方で、青年のほうが成人より、甘えず、影響を受けにくい傾向を示したのは、古市(1984)が述べているように、青年は親からの自立や人格的成熟といった内面的な成熟を重視しているため、成人より、人の影響を受けず、甘えて過ごしたくない心性を基本的に持っている時期と考えられる。

過剰な頑張るについては、菱田他(菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014)および、金子・菱田(2011)の、青年期の分析では、適応的な依存は抽出されず、本研究の30代、40代も適応的な依存ではなく、「過剰な頑張る」因子として抽出された。この結果については、30代、40代は社会で頑張る働くことが求められている世代と考えられ、年齢的に頑張ることが可能な世代とも考えられる。日本における30代、40代の働く世代は、本研究で考えてきた、過剰に頑張ることなく、適応的に依存しつつ、自立・自律して自分らしく生きている内容は示されなかった。この頑張る内

容が多少緩やかに生きる内容に変わること、頑張り過ぎないことの手段の一つとしての適応的な依存が獲得されることも考えられる。但し、頑張る心性は、頑張りたい時に、頑張ることが達成されれば、達成感と共に生きる力と考えられることから、動機付けとの関係も考えられる。本研究では、過剰な頑張りの項目すべて逆転項目であり、それらにあてはまると答える人ほど適応的な依存がなされていない。尺度としては、あてはまる、と答える人ほど適応的な依存がなされている内容になるよう、項目を見直す必要がある。

「感情統制」因子（悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる）について、青年は成人より低いという予測は支持されず、青年のほうが成人より高かった。「感情統制」は、離職や離婚などの葛藤が感情統制力を越えた時に統制できなくなる等が考えられ、発達とともに獲得される、というより、自分の時間を適切に過ごせるゆとり等と関係がある結果とも考えられる。推測の域を出ないものの、本研究で、40代のほうが、青年期、30代より、「感情統制」が低かったのは、40代の社会や家庭環境が、青年期、30代より複雑化し、自分の自由になる時間を作りにくく、仕事上も、上下に挟まれ、周囲からの軋轢で葛藤が増していること等が考えられる。

以上の考察の結果、以下の3点が課題となった。1点目は、併存的妥当性についてである。菱田他（菱田他, 2010, 2011; 菱田・野口, 2014）と本研究の4回にわたる調査の際、「適応的な依存」因子、「甘え」因子に関わる項目の見直しと「対人協調」因子項目の削除をおこなったが、菱田他（2010）における併存的妥当性の確認後、再確認をしていない。変更を加えた適応的な依存と甘えについて、自尊感情と対人依存欲求等に関わる既成尺度との相関を分析することにより、尺度の併存的妥当性を再確認する必要がある。2点目は、確認的因子分析結果が十分に示されなかった、という点である。因子分析における因子構造が妥当かどうかを再度検証するための確認的因子分析（検証的因子分析）結果は、中程度の適合度であった。その一因として、「自立・自律性」の尺度が網羅する範囲が広いと、仮定した因子数が多く、一つの因子に関わる項目数が少なくなったことも考えられ、自立・自律性の範囲と質問項目の検討が必要である。3点目は、自立・自律性の各因子における、青年期、30代、40代の比較において、各世代の自立・自律性の因子構造が同じであるかどうかの確認が十分ではない点である。

「適応的な依存」因子の確認についても、40代まででは、「過剰な頑張り」因子として抽出され、「適応的な依存」因子が確認できなかった。この結果をふまえ、70代くらいまでの高齢者を対象とした比較検討も必要である。

今後、本研究で作成した自立・自律性尺度を使用し、自立・自律性と心の健康の維持との関わり、心理的適応・社会的適応との関係、困難に対する耐性との関係などを調べ、自立・自律性を獲得し、適応的に生きるための支援となる研究の継続が必要である。

付 記

本研究は、第2著者に対する金沢大学先魁プロジェクト「グローバル時代における若年世代の価値と規範に関する人間科学（研究者代表：轟亮, 2016-2017年度）」の助成を受けて実施された調査である。調査をさせていただき、感謝いたします。

査読者の先生方には、細かい的確なご指導をいただき、感謝いたします。

引用文献

- 土居 健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 江口 恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 藤原 あやの・伊藤 裕子 (2010). 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達 カウンセリング研究, 43, 33-42.
- 福島 朋子・渡辺 恵子 (1995). 成人における自立観 (1) 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 476.
- 福島 朋子 (1997). 成人における自立観: 概念構造と性差・年齢差 仙台白百合女子大学紀要, 1, 15-26.
- 福島 朋子 (1998). 人間的自立に関する探索的研究: 40代・50代既婚者の調査から 仙台白百合女子大学紀要, 2, 105-115.
- 福島 朋子 (1999a). 成人における自立の概念構造 (2) 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 320.
- 福島 朋子 (1999b). 既婚成人のもつ自立達成感についての一考察 仙台白百合女子大学紀要, 3, 9-21.
- 古市 裕一 (1984). 成人性基準に関する心理学的研究 岡山大学教育学部研究集録, 65, 17-25.

- 菱田 陽子・加藤 礼子・金子 勲榮 (2010). 現代青年の自立性に関する研究: 自立性尺度作成の試み 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2, 157-168.
- 菱田 陽子・野口 喜美代・金子 勲榮 (2011). 現代青年の自立性に関する研究 (2): 交流分析における自我状態と自立性 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 3, 291-302.
- 菱田 陽子・野口 喜美代 (2014). 現代青年の自立性に関する研究 (5): 交流分析における透過性調整力を含む自我状態と自立・自律性 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 6, 285-304.
- 池見 西次郎・杉田 峰康 (1990). セルフ・コントロール: 交流分析の実際 創元社
- 井上 忠典 (1995). 大学生における親との依存: 独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大学心理学研究, 17, 163-173.
- 伊藤 美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理臨床学研究, 13, 39-47.
- 神谷 ゆかり (1997). 自立の概念規定について: “autonomy” の視点を中心に 安田女子大学紀要, 25, 105-113.
- 金子 勲榮・菱田 陽子 (2011). 現代青年の自立性に関する研究 (3): 困難非回避傾向等との関係 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 3, 317-327.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2005). 青年期における心理的自立 (III): 青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 55, 77-85.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (II): 心理的自立尺度の作成 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 56, 17-30.
- Muraven, M., Rosman, H., & Gagné, M. (2007). Lack of autonomy and self-control: Performance contingent rewards lead to greater depletion. *Motivation and Emotion*, 31, 322-330.
- 西田 裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 大野 久 (1993). 青年期の自律性、主導性とそれにかかわる要因 新潟青陵女子短期大学研究報告, 23, 57-68.
- 高橋 恵子 (1968). 依存性の発達の研究: I 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2006). 適応的な依存とは?: 依存概念の再検討 筑波大学心理学研究, 31, 73-86.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2007a). 依存の仕方がその後の自己成長感に与える影響: 自己決定的, 他者依拠的な依存の仕方 日本心理学会大会発表論文集, 71, 109.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2007b). 依存欲求・行動表出タイプの検討: 自己価値観と対人関係性の観点から 健康心理学研究, 20, 1-11.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2008). 自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響について 筑波大学心理学研究, 35, 65-72.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2009). 依存性が自律性に与える影響: 自己成長感を媒介として 学園の臨床研究, 8, 31-38.
- 谷 冬彦 (1999). 青年期における「甘え」の構造 相模女子大学紀要 A 人文・社会系, 63A, 1-8.
- 山田 裕子・宮下 一博 (2007). 青年の自立と適応に関する研究: これまでの流れと今後の展望 千葉大学教育学部研究紀要, 55, 7-12.
- 山田 裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.
- 吉田 寛輝 (2019). いちばんやさしい医療統計 アトムス
(2018 年 10 月 10 日受稿, 2021 年 8 月 22 日受理)

青年期および成人期における自立・自律性と対人依存欲求および自尊感情との相互関連性に関する研究

菱田陽子¹⁾・荒木友希子¹⁾

1) 大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科

〒920-8640 石川県金沢市宝町 13-1

(連絡先) 〒924-0072 石川県白山市千代野西 6 丁目 9-2

電話 090-8099-4003

yhishida@gmail.com

本文の総字数 11240 文字

文献の総字数 930 文字

Summary 339 文字

本研究では、青年期および成人期の自立・自律性と、対人依存欲求および自尊感情との関係について検討した。その結果、「独自性」、「甘え」は「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする」道具的依存欲求と関係があり、「影響受けやすさ」は「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得る」情緒的依存欲求と関係していた。

自尊感情については、自己肯定感が高ければ高いほど、自立・自律性の「独自性」、「将来展望」、「感情統制」、「自立認識」は高くなることが明らかとなった。この結果は、自己肯定感が自立・自律性の獲得に重要な関わりがあることを示している。この自己肯定感によって適切な依存行動がなされ、自信を持ち、自己成長感を感じ、自立・自律性が高まることが示唆された。

キーワード：青年期および成人期、適応的依存を含む自立・自律性、対人依存欲求、自尊感情、

I. 背 景

自立 (independence) は他者から独立して主体性を持つという内容だけでなく、適度に他者に依存するという要素も含まれることが近年の研究で明らかになっている (福島 (1997) ⁽¹⁾, Ryan & Lynch (1989) ⁽²⁾)。これらの報告により、自立に含まれる依存は自立と対立的なものではなく、適応的な依存であることが明らかにされている。自立に関連した概念に自律 (autonomy) がある。本研究では、相互に関わりあう自立と自律を自立・自律性として定義している菱田・荒木 (2021) ⁽³⁾, の定義を用いて、自立・自律性と相互に関連性のある対人依存欲求および自尊感情との関係について検討することを目的とする。自立・自律性の定義については後に詳しく述べる。

適応的な自立についての先行研究は、親子関係における分離、独立、親密性と適応的な自立に関するものがある。水本・山根 (2010) ⁽⁴⁾ は、娘が母親から精神的に分離し自立している、もしくは分離していなくても、精神的距離が近く、信頼関係が築かれていれば、娘の適応的な自立性が高いと述べている。この結果から、適応的な精神的自立 (親から心理的に分離して親とは異なる自己を築くこと) は、親との信頼関係を基盤とした親和的關係性が土台となっていることを明らかにした。水本・山根 (2011) ⁽⁵⁾ は、母親との信頼関係と母親からの心理的分離を下位尺度とした母子関係における精神的自立尺度を作成し、「母親との信頼関係は、適応と関連した母子関係の個人差を示す指標」⁽⁵⁾ であり、「母親からの心理的分離は、発達的に変化する指標」⁽⁵⁾ であることを確認している。赤木 (2018) ⁽⁶⁾ は、水本・山根 (2011) ⁽⁵⁾ と比較することを含めて母親と娘の關係性を多角的に検証するための尺度を作成し、分離と結合、および精神的健康の視点で分析の結果、自立群が健康な分離タイプであったと述べている。

自律については、例えば、Beyers, Goossens, Vansant, & Moors (2003) ⁽⁷⁾, や Muraven, Roseman & Gagné (2007) ⁽⁸⁾ は、自主性に向かう autonomy と制御を意味する self-governance or self-control の二つの意味をもつと考えた。Beyers & Goossens (1999) ⁽⁹⁾ も自己制御や自主性を重視している。しかし、Spear & Kulbok (2004) ⁽¹⁰⁾ は、親からの分離・独立を強調するのではなく、つながりや愛着を維持することが重要であると述べている。

自立 (independence) と自律 (autonomy) の違いについては、例えば、石川

(2009)⁽¹¹⁾の研究がある。石川(2009)⁽¹¹⁾は、社会福祉の立場から「能力としての自律」を論ずるために、自立 independence と自律 autonomy の異同について検討し、これらの概念を整理している。自立 independence と自律 autonomy は隣接する概念とし、自立は身体・経済の独立を強調した語であり、自律は意思決定の側面を重視した概念・用語としている。

本研究で考えている自律と適応的な依存については、竹澤・小玉(2007)⁽¹²⁾が、適応的な依存の表出が自己成長感を介することにより自律性を促すことを示した。この結果に基づき、竹澤(2009)⁽¹³⁾は依存性と自律性の関係を調べ、「情緒的依存欲求も道具的依存欲求も自律性に負の影響、情緒的依存行動も道具的依存行動も自己成長感に正の影響を与え、自己成長感は自律性に正の影響を与えている」ことを明らかにした。竹澤(2009)⁽¹³⁾は「人は適切に他者に依存することによって、自信をもつことができ、できなかったことができるようになり、自己成長感を感じる」と考え、自己成長感を感じるによって、自律性が高まることを確認した。

自立と自律について、心理学の分野では、その違いを明らかにしているものより、自立と自律を混在させているか、その違いを明らかに述べず、自立か自律のどちらかをを用いているものが多い。その理由として、二つの概念は相互関連した概念であるため、違いを明らかにすることが困難であると考えられることから、本研究では、自立と自律を互いに関連した自立・自律性として捉え「自立性を自分らしい自主性、自律性を自己実現に向かう自己制御とそれぞれ定義する。これをもとに相互に関係しあう自立・自律性とは、「親・大人から自立し、親、家族、教師、友人などの他者から行き過ぎない支援を頼る適応的な依存を有し、個性やユニークさとして示される個人の独自性にもとづく主体性を意味する(菱田・荒木, 2021)⁽³⁾」と定義する。

この定義にもとづく自立・自律性は、適応的な依存を有していることから対人依存欲求と関連していると考えられる。ここで扱う対人依存欲求は「是認、支持、助力、保証の源泉として他人を利用ないし頼りにしたいという欲求(竹澤・小玉, 2004)⁽¹⁴⁾」と定義する。又、「個性やユニークさとして示される個人の独自性」と定義した自立・自律性は、自己を肯定的に受け入れる自己受容の側面を有していると考えられることから、自己受容の内容も含む自尊感情(桜井, 2000)⁽¹⁵⁾とも関連していると考えられる。ここで扱う自尊感情は、ローゼンバーグの自尊感情(星野, 2010)⁽¹⁶⁾に関する、星野による解釈を定義とする。星野は、ローゼンバーグの主張について、

自尊感情を一つの特異な対象、すなわち自己 (the self) に対する肯定的、または否定的態度として捉え、このような自尊感情には、かなり異なった二つの意味があると解釈している。「ひとつは、自分をとても良い (very good) と感じる側面であり、もう一つは自分をこれで良い (good enough) と感じる側面」である。

自尊感情については、ローゼンバーグの自尊感情研究が知られており、多くの研究がある。例えば、桜井 (2000)⁽¹⁵⁾ は星野 (2010)⁽¹⁶⁾ による解釈を紹介し、自尊感情尺度は、2 側面 (自分をとても良い (very good) と感じる側面と、自分をこれで良い (good enough) と感じる側面) の内、前者の自信や優越感ではなく、後者の自己受容を意味するような自尊感情を対象として測る尺度であるとしている。この考え方に従えば、自尊感情が低いということは、自己を拒否し、自己に対して不満であり、自己を軽蔑している、自己への尊厳を欠いている状態と言える。菱田ら (2021)⁽³⁾ が考えている自立・自律性は自分をこれで良いと考え、自己を大切なものとして受容している自尊感情を根幹として、特性を考えている。

福留 (2017)⁽¹⁷⁾ は、ローゼンバーグ自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale : Rosenberg, 1965⁽¹⁸⁾ ; 山本・山成・松井, 1982⁽¹⁹⁾) を中学生に用いて検討した結果、肯定的項目因子と否定的項目因子の 2 因子に分かれることを明らかにした。更にこの 2 側面について、肯定的項目で構成される因子と逆転項目からなる否定的項目で構成される因子であったとしている。肯定的項目で構成される因子は、心理的適応を内容とし、適応的な自己評価を測定していると解釈し、否定的項目で構成される因子は、ストレス耐性の調整を意味していると述べている。

以上の知見をふまえ、本研究では自立・自律性と、対人依存欲求および自尊感情との相互関連性を探索的に検討する。自立・自律性と、対人依存欲求および自尊感情との関連を明確にすることによって、自立・自律性の獲得には、他者からの独立した主体性のみを育てるのではなく、適応的な依存および自尊感情を育てる必要のあることを示すことができるであろう。

以上により、本研究では以下の仮説を立て分析、考察する。仮説 1 : 自立・自律性の 7 因子 (「独自性」、「将来展望」、「甘え」、「影響受けやすさ」、「過剰な頑張り」、「感情統制」、「自立認識」 (菱田・荒木, 2021)⁽³⁾) のうち、依存性と関連する内容を含む、「甘え」(人に頼りたい) と「過剰な頑張り」(適応的な依存を内容とする) は、対人依存欲求尺度 (竹澤・小玉, 2004)⁽¹⁴⁾ の「情緒的依存」、「道具的依存」と

正の関連性があるであろう。仮説 2：自立・自律性の 7 因子のうち、自己を肯定的に受け入れ、自己受容の特性を含む「独自性」、「将来展望」、「感情統制」、「自立認識」は、自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）⁽¹⁹⁾の肯定的項目で構成される肯定的項目因子と正の関連性があるであろう。

ここでは、対人依存欲求、自尊感情それぞれと自立・自律性の 7 つの特性との直線的な関わりを明らかにしたいため、対人依存欲求と自尊感情の交互作用は考慮しないこととする。

II. 方 法

本研究は、「グローバル化する現代社会に生きる若者や成人の価値と規範に関わる意識についての研究（金沢大学先魁プロジェクト「グローバル時代における若年世代の価値と規範に関する人間科学（研究者代表：轟亮，2016-2017 年度）」として合同調査の為に作成された質問紙の一部を使用した。ただし、菱田・荒木（2021）⁽³⁾で使った質問項目は本研究の分析に使用していない。

1. 調査対象者および手続き

対象は、47 都道府県の 10 代（18 歳以上）38 人、20 代 308 人、30 代 424 人、および 40 代 530 人の 1,300 人（男性 661 人、女性 639 人、平均年齢 35.69 歳）とした。データ収集は、マイボイスコム株式会社を通じた Web 調査により実施した。調査実施期間は、2017 年 2 月 17 日（金）18 時にアンケート案内のメールを配信し、最終回答者の回答終了時刻は 2 月 19 日（日）12 時 28 分であった。

2. 質問紙

合同調査であるため、基本属性として、性別、年齢、社会についての意識、仕事の有無、年収、最終学歴とそのときの暮らし、家族および世帯の状況を尋ねているが、本研究では、年齢のみを分析に用いた。質問紙に用いた使用尺度は 3 種類であった。

使用尺度

自立・自律性尺度 菱田・荒木（2021）⁽³⁾で報告されている、35 項目 7 因子構造の自立・自律性尺度を使用した。7 因子 35 項目の内容は、自立に関わる 4 因子として、「将来展望」因子 4 項目（例：自分の将来について考えをもっている）、「影響受けやすさ」因子 4 項目（例：周りの影響を受けやすく、人の意見に流されやすい）、

「自立認識」因子 3 項目（例：どうすれば、家からの自立ができるか知っている）、
「感情統制」因子 4 項目（例：悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる）、
適応的な依存に関わる 2 因子として、「過剰な頑張り」因子 6 項目（例：困っても「助けて」と言いたくない、どうにもならなくても助けを求められない）、
「甘え」因子 7 項目（例：人に頼って楽に過ごしたい）、独自性に関わる 1 因子として、
「独自性」因子 7 項目（例：他人と違っていても自分の考え方が大切、自分なりの考え方で生きたい）である。これら 35 項目について、「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

対人依存欲求尺度 竹沢・小玉（2004）^{（14）}による、20 項目 2 因子構造の対人依存欲求尺度を使用した。2 因子 20 項目の内容は、「情緒的依存」因子 10 項目（例：人から「元気？」などの気配りの言葉がほしい）と、「道具的依存」因子 10 項目（例：忙しいときには誰かに手伝ってほしい）である。これら 20 項目について、「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

自尊感情尺度 Rosenberg（1965）^{（18）}の日本語版である自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）^{（19）}を使用した。ローゼンバーグの Rosenberg Self Esteem Scale は、1 因子構造であるが、本研究では、福留（2017）^{（17）}の主張による 2 因子構造を用いた。2 因子 10 項目の内容は、「自己肯定」因子 5 項目（例：色々な良い素質を持っている）と、「自己否定」因子 5 項目（例：自分は全くだめな人間だと思うことがある）である。これら 10 項目について、「1. あてはまる」から「4. あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

3. 手続きおよび倫理的配慮

Web ページ画面に「あなたご自身についてのアンケート」として、質問票と解答欄を表示し、対象者に回答を送信してもらう方法で実施された。実施にあたっての倫理的配慮について、「本調査は学術研究の一環としておこなわれるものであり、グローバル化する現代社会に生きる若者や成人の価値と規範に関わる意識について調べることを目的としてる。回答は匿名で、集計して使用する。答えたくない項目には答える必要がない。」と説明した。

回答はマイボイスコム株式会社において集計され、個人情報 that 特定されない集計データとして研究者に渡された。

倫理的配慮については、金沢大学人間社会学域「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会において、承認番号 2016-10 として、承認された。

Ⅲ. 結 果

1. 回答の有効性

回答が歪められる判断の基準として、①明らかに回答速度が速すぎる（高速回答）、②連続して同一の評定値を多く示している（連続 50 回以上回答）、③明らかに一致しなければならない項目に対する矛盾回答（不一致項目）、④通常は明らかに認められる或いは認められない事柄に対する回答（虚偽項目）、⑤いわゆる社会的望ましき要因（社会的望ましき）の 5 つについて検討した。その結果、①3 分以内で回答した高速回答者 2 名、②78 項目中、回答 1 (あてはまる)、回答 2 (少しあてはまる)、回答 3 (あまりあてはまらない)、回答 4 (あてはまらない) をそれぞれ連続 50 回以上回答した 42 名、不適切点検のための③不一致項目 3 組 6 項目全て不一致だった 1 名、④虚偽項目 4 項目と⑤社会的望ましき項目 3 項目の 7 項目中 6 項目以上「あてはまる」を選んだ 3 名、計 48 名を除外した。

以上、回答の得られた 1,300 名の内、1,252 名 (10 代 36 名 (18-19 歳) : 平均 18.6 歳, 標準偏差 .49, 20 代 (20-29 歳) 290 名 : 平均 24.3 歳, 標準偏差 2.93, 30 代 407 名 (30-39 歳) : 平均 34.3 歳, 標準偏差 2.97, 40 代 519 名 (40-49 歳) : 平均 44.8 歳, 標準偏差 2.84) を分析対象とした。集計データの解析には IBM SPSS Statistics 25 を用いた。本研究は、菱田・荒木 (2021) ⁽³⁾ で使用したデータの一部を用い、回答の有効性については菱田・荒木 (2021) ⁽³⁾ と同じ内容を用いた。

2. 対人依存欲求の信頼性の検討

対人依存欲求尺度 (竹沢・小玉, 2004) ⁽¹⁴⁾ の下位尺度である「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定を得るという情緒的依存」に関わる 10 項目について、Chronbach の α 係数を求めたところ .906 であった。次に「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする道具的依存」に関わる 10 項目について、Chronbach の α 係数をもとめたところ、.910 であった。

3. 自尊感情の信頼性の検討

Rosenberg, M. (1965) の邦訳版である自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) ⁽¹⁹⁾ 10 項目の内、肯定的項目 5 項目について Chronbach の α 係数を求めたところ .859, であった。否定的項目については、否定的項目 5 項目から、福留 (2017) ⁽¹⁷⁾ で示されているように、項目「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を抜いた 4 項目について、Chronbach の α 係数を求めたところ .842 であった。因子分析によっても同じ因子構造を確認した。

表 1 に、各下位尺度得点の項目数、 α 係数、範囲、平均値と標準偏差を示した。自尊感情の因子構造については、最尤法による因子抽出、プロマックス法による軸の回転を用いた。

4. 自立・自律性の特徴

(1) 対人依存欲求・自尊感情との相関係数からみた特徴

各自立・自律性因子と対人依存欲求および自尊感情との相関係数を算出したところ、有意な相関を得られた項目があった。相関の強さについては、相関係数の絶対値によって相関の強さを読み取ることができる (柳井・岩坪, 2007) ⁽²⁰⁾。 $0.7 \leq |r|$ は強い相関あり, $0.4 \leq |r| < 0.7$ は中程度の相関あり, $0.2 \leq |r| < 0.4$ は弱い相関あり, $|r| < 0.2$ はほとんど相関なしとされているところから以下の結果を読み取ることができた。

各自立・自律性因子と対人依存欲求では、「独自性」と「道具的依存欲求」の間に弱い正の相関 ($r = .243, p < .01$) があり、「甘え」と「道具的依存欲求」の間 ($r = .542, p < .01$), 「甘え」と「情緒的依存欲求」の間 ($r = .429, p < .01$) に中程度の正の相関があり、「影響受けやすさ」と「道具的依存欲求」の間 ($r = .308, p < .01$), 「影響受けやすさ」と「情緒的依存欲求」の間に弱い正の相関 ($r = .366, p < .01$) が認められた。また、対人依存欲求の「道具的依存欲求」と「情緒的依存欲求」の間にも中程度の正の相関 ($r = .630, p < .01$) が認められた。

各自立・自律性因子と自尊感情では、「独自性」と「自己肯定感」の間 ($r = .423, p < .01$), 「将来展望」と「自己肯定感」の間 ($r = .496, p < .01$) に中程度の正の相関があり、「将来展望」と「自己否定感」の間 ($r = .385, p < .01$) に弱い正の相関があり、「甘え」と「自己否定感」の間 ($r = -.269, p < .01$), 「影響受けや

すさ」と「自己否定感」の間 ($r = -.237, p < .01$), 「過剰な頑張り」と「自己否定感」の間 ($r = -.245, p < .01$) に弱い負の相関があり, 「感情統制」と「自己肯定感」の間 ($r = .326, p < .01$), 「感情統制」と「自己否定感」の間

($r = .333, p < .01$) に弱い正の相関があり, 「自立認識」と「自己肯定感」の間 ($r = .455, p < .01$) に中程度の正の相関があり, 「自立認識」と「自己否定感」の間 ($r = .224, p < .01$) に弱い正の相関が認められた。また, 自尊感情の「自己肯定感」と「自己否定感」の間にも中程度の正の相関 ($r = .556, p < .01$) が認められた。結果を表 2 に示す。

(2) 自立・自律性と対人依存欲求および自尊感情の関係

更に各自立・自律性因子と, 対人依存欲求および自尊感情との関係を検討するため, 各自立・自律性因子を従属変数とし, 対人依存欲求因子・自尊感情因子を独立変数として重回帰分析 (ステップワイズ法) を試みた。相関行列では, $|r| > .80$ となるような変数は存在しなかったため, すべての変数を対象とした。VIF は全て 10.0 未満であり, 多重共線性の問題はなかった。

重回帰分析の結果, それぞれの自立・自律性因子の決定係数および, 有意な対人依存欲求因子・自尊感情因子の標準化係数の結果は以下のとおりであった。

「独自性」の決定係数は .239 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 道具的依存欲求 ($\beta = .242, p < .01$), 情緒的依存欲求 ($\beta = -.134, p < .01$), 自己肯定感 ($\beta = .497, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = -.132, p < .01$) であった。「将来展望」の決定係数は .283 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 道具的依存欲求 ($\beta = -.150, p < .01$), 情緒的依存欲求 ($\beta = .176, p < .01$), 自己肯定感 ($\beta = .398, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = .141, p < .01$) であった。「甘え」の決定係数は .330 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 道具的依存欲求 ($\beta = .400, p < .01$), 情緒的依存欲求 ($\beta = .165, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = -.160, p < .01$), であった。「影響受けやすさ」の決定係数は .178 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 情緒的依存欲求 ($\beta = .349, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = -.210, p < .01$), であった。「過剰な頑張り」の決定係数は .118 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 道具的依存欲求 ($\beta = -.218, p < .01$), 自己肯定感 ($\beta = .236, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = -.428, p < .01$) であった。「感情統制」の決定係数は .170 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 道具的依存

欲求 ($\beta = -.090, p < .01$), 情緒的依存欲求 ($\beta = -.117, p < .01$), 自己肯定感 ($\beta = .277, p < .01$), 自己否定感 ($\beta = .148, p < .01$) であった。「自立認識」の決定係数は .207 ($p < .01$) であり, 標準化係数は, 自己肯定感 ($\beta = .455, p < .01$) であった。重回帰分析の結果を表 3 に示す。

IV. 考 察

本研究の目的は, 菱田・荒木 (2021) ⁽³⁾ で示された, 自立・自律性の 7 因子を用いて, 各自立・自律性因子と対人依存欲求・自尊感情の関係を検討することであった。まず, 仮説 1 について検証する。相関係数からみた対人依存欲求と自立・自律性の「甘え」および「過剰な頑張り」との関連について, 「甘え」と「道具的依存欲求」および「情緒的依存欲求」との間に正の相関のあることが確認できた。これにより, 「甘え」との関連は支持されたが, 「過剰な頑張り」との関連は支持されなかった。

「過剰な頑張り」と名付けた適応的な依存と対人依存欲求が相関しなかったことについては, 対人依存欲求尺度の適応的な側面に注目した項目が, 「過剰な頑張り」の項目と内容が異なっていたことによると考えられる。「過剰な頑張り」の項目は「どんなに困った状態になっても, 私は, 誰かに助けてと言いたくない」など, 全て反転項目であり, 適応的な依存の内容を適切に示されていなかったと考えられるため, 項目の示し方を反転項目にしないなど, 検討が必要であることが示された。このほか, 相関が認められた, 「影響受けやすさ」ならびに「独自性」と対人依存欲求について考察する。

「影響受けやすさ」と対人依存欲求の「道具的依存欲求」, 「情緒的依存欲求」は共に弱い正の相関があった。この結果から, 「周りの影響を受けやすく, 人の意見に流されやすい」精神的揺らぎを内容とする「影響受けやすさ」は, 「情緒的で親密な関係によって安定性を求める (情緒的依存欲求)」および「他者からの道具的援助 (道具的依存欲求)」と関連のあることが示唆された。

「独自性」と対人依存欲求の「道具的依存欲求」は弱い正の相関があるが, 「情緒的依存欲求」とはほとんど相関が認められなかった。この結果から, 「独自性」は, 他人と違っていても, 自分の考え方が大切, 自分なりの考え方で生きたい内容の因子であり, 他からの精神的支援とは関わりがなく, 具体的支援と弱い関わりのある因子であることが示唆された。

次に、仮説2の自尊感情と自立・自律性の因子の相関については、自尊感情の「自己肯定感」は、自立・自律性の自己を肯定的に受け入れていることによる特性である。「独自性」「将来展望」「感情統制」「自立認識」各因子とそれぞれ正の相関を示した。この結果より、自立・自律性の「独自性」「将来展望」「感情統制」「自立認識」因子は、自己を肯定的に受け入れている内容の因子であるとした仮説は支持された。但し、「将来展望」「感情統制」は、自尊感情の「自己否定感」とも正の相関を示し、「自己肯定感」より弱い正の相関ではあるが、自己を否定的に捉えている内容も含んでいることが示された。人は自分の能力、可能性を肯定的に捉えるのみではなく、否定的にも捉えて、将来を見据えていることが示唆された。また、人は自分の感情を肯定的に捉えるのみではなく、否定的にも捉えて自己をコントロールしていることも示された。

各自立・自律性因子と対人依存欲求・自尊感情の因果関係について、相関分析結果も加えて、重回帰分析により示された点について考察した。

「独自性」「将来展望」「感情統制」「自立認識」の4因子は、共通して、「自己肯定感」が高いと築きやすいことが示唆された。この共通性の他、「独自性」は人に具体的な援助を求めることと関わっており、自分の考え方のみを重視するのではなく、適応的な依存をすることで、独自性が成立することが示された。「将来展望」は、他人に依存することとの関わりは見られなかった。一方、「自己否定感」と正の中程度に近い相関が示されたが重回帰分析の偏回帰係数は小さく、「自己否定感」は「将来展望」に間接的に影響している擬相関であることが推測された。「感情統制」は、情緒的にも具体的に人に依存しないほうが、感情のコントロールをしやすいことも示され、人に頼らず、自分を肯定的に捉えている心性が感情をコントロールしやすいことが示唆された。「自立認識」は、「自己否定感」とも弱い相関が見られたが、重回帰分析では有意な関係はみられず、「自己否定感」は「自立認識に間接的に影響している擬相関であることが推測された。

「過剰な頑張り」は、重回帰分析により「自己否定感」と「道具的依存欲求」はマイナス、「自己肯定感」はプラスの偏回帰係数が示されたが、「自己否定感」以外、相関はほとんど0であった。また、「自己否定感」との相関も非常に弱かった。この結果より、「自己否定感」「自己肯定感」「道具的依存欲求」は抑制変数であり、「自己肯定感」と「自己否定感」の相関もそれなりに高いことを含めて、更なる分析が必要と

考えられた。この因子は、頑張り過ぎることを内容としており、「自己否定感」が低く、自己を肯定することで頑張ることはできるが時には頑張り過ぎることが示された。頑張り過ぎることによって、心のバランスが崩れることも考えられ、この心性が調整されることにより、適応的な依存がなされることも示唆された。重回帰分析の結果からは、具体的な援助は求めないことも示され、人に依存する具体的方法を見つけにくい心性であることも考えられた。この因子は、「自己否定感」とは弱い負の相関が見られたが、「自己肯定感」と相関は見られず、重回帰分析では、「自己肯定感」と正の関係、「自己否定感」と負の関係が示されたことから、自己否定感が強いと頑張ることができないとも考えられた。

「甘え」は、具体的な援助および情緒的な親密性によって安定を得ようとする気持ちと強く関連していることが示された。「甘え」は人に頼って楽に過ごしたいことを内容としているが、「甘え」と「自己否定感」との間に低い負の関係も示され、甘えられないと自己否定感を感じることとも推測された。これらの結果から、甘えを自覚することによって、適応的な依存が成立するとも考えられた。

「影響受けやすさ」は、人と親密な関係性を築きやすく、自己否定感が低いことと関連していることが示された。「影響受けやすさ」と「道具的依存欲求」との間に正の相関が示されたが、重回帰分析では有意な関係はみられず、「道具的依存欲求」は「影響受けやすさ」に間接的に影響していることが推測された。この結果より、「影響受けやすさ」と依存欲求の複雑な関係性が示唆された。

総合的に考察すると本研究によって、自立・自律性は、適応的な依存性の側面を有するとともに、重回帰分析の結果から、自己肯定感が自立・自律性の獲得に関わりがあることが示唆された。その根拠としては、自立・自律性の 7 因子の内「甘え」、「影響受けやすさ」以外の 5 因子（「独自性」、「将来展望」、「過剰な頑張り」、「感情統制」、「自立認識」）が「自己肯定感」と関わっていることが明らかになったことがあげられる。さらに重回帰分析によって、「自己肯定感」が、適応的な依存を内容とする「過剰な頑張り」因子と正の関わりが示されたことから、自己肯定感が高ければ、適応的な依存行動がなされることが考えられた。適応的な依存ができれば、竹澤（2009）⁽¹³⁾が示したように、自信を持つことができ、できなかったことができるようになり、自己成長を感じ、自立・自律性が高まる結果になると考えられた。

V. 限界と課題

以下の4点について本研究の限界であり、課題となった。第一の課題は、本研究により菱田らの自立・自律性の概念にもとづく各構成因子が、自尊感情や対人依存欲求とどのような関係にあるかは確認できたが、対人依存欲求と自尊感情の説明量はいずれの因子の決定係数も.146～.345の間の値であり、自尊感情や対人依存欲求以外の要因との関わりを調べる必要がある点である。たとえば、自立・自律性に関わる困難に対する耐性との関係、幸福感との関わりなどを調べる必要がある。第二の課題は、以下の点である。竹澤・小玉（2004）⁽¹³⁾、竹澤（2009）⁽¹²⁾は、自己成長感を媒介として、依存行動が自律に正の関連を示すことを明らかにした。しかし、本研究では、自己肯定感が、適応的な依存を内容とする「過剰な頑張り」因子と正の関わりが示されたことから、自己肯定感を媒介としても依存行動が自立・自律性に正の関連を示すことが推測された。これに関して、更に媒介分析をすることにより自己肯定感の獲得が自立・自律性の発達要因の一つであることを明確にする必要もある。第三の課題は、本研究では、性差や年代における群間差、教育歴、収入の差の有無なども分析に加えていない点である。これらの群と自立・自律性の関係も調べる必要がある。最後に、日本学術会議社会学委員会 Web 調査の課題に関する検討分科会（2020）⁽²¹⁾が述べているように、Web 調査の限界点も考える必要がある。具体的には、Web 調査の標本は、無作為抽出ではないため、標本の代表性が保証されない。このため、総調査誤差など問題点を正確に理解する必要がある。また、調査対象者には、「Web 調査に応じる人と慎重になって応じない人との間で生じる選択バイアスにも注意を払う必要がある」⁽²¹⁾。

今後実証的な研究の継続が必要であるが、幼少時からの養育環境、教育環境において、「自己肯定感」を育てることが自立・自律性の確立に重要な要因であることが示されたことは、心理的葛藤の様々な問題解決に貢献でき、意味のあることと考えられる。

付 記

本研究は、第2著者に対する金沢大学先魁プロジェクト「グローバル時代における若年世代の価値と規範に関する人間科学（研究者代表：轟亮，2016-2017年度）」の助成を受けて実現しました。ここに記して謝意を表します。

文献

1. 福島朋子：成人における自立観：概念構造と性差・年齢差．仙台白百合女子大学紀要． 1:15-26, 1997
2. Ryan, R.M. & Lynch, J.H. : *Emotional autonomy versus detachment: Revisiting the vicissitudes of adolescence and young adulthood. Child Development. 60:340-356. 1989*
3. 菱田陽子・荒木友希子：青年期と成人期の比較による自立・自律性の検討：適応的な依存と甘えの観点から．心理学の諸領域． 10:33-43, 2021
4. 水本深雪・山根律子：青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連性から．発達心理学研究． 21:254-265, 2010
5. 水本深雪・山根律子：青年期から成人期への移行期における母娘関係：「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討．教育心理学研究． 59:462-473, 2011
6. 赤木真弓：母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響：母娘関係尺度の作成を通して．発達心理学研究． 29:114-124, 2018
7. Beyers, W., Goossens, L., Vansant, I & Moors, E. : *A Structural Model of Autonomy in Middle and Late Adolescence: Connectedness, Separation, Detachment, and Agency. Journal of Youth and Adolescence. 32:351-365. 2003*
8. Muraven, Mark, Roseman, Heather, Gagné, Marylène : *Lack of autonomy and self-control: Performance contingent rewards lead to greater depletion. Motivation and Emotion. 31:322-330, 2007*
9. Beyers, W., Goossens, L. : *Emotional autonomy, psychosocial adjustment and parenting: interactions, moderating and mediating effects. Journal of adolescence. 22:753-69. 1999*
10. Spear, J.H. & Kulbok, P. : *Autonomy and Adolescence: A Concept Analysis. Public Health Nursing. 21:144-152. 2004*

- 11.石川時子：能力としての自律：社会福祉における自律概念とその尊重の再検討.
社会福祉学. 50(2):5-17, 2009
- 12.竹澤 みどり・小玉 正博：依存欲求・行動表出タイプの検討ー自己価値観と対人
関係性の観点から. 健康心理学研究. 20⁽¹⁾, 1-11, 2007
- 13.竹澤みどり：依存性が自律性に与える影響：自己成長間を媒介として. 学園の臨
床研究. 8:31-38, 2009
- 14.竹沢みどり・小玉正博：青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. 教
育心理学研究. 52:310-319, 2004
- 15.桜井茂男：ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理
学研究. 12:65-71, 2000
- 16.星野命：星野命著作集 I 人間性・人格の心理学. 北樹出版, 東京, 2010, 196-
201p
- 17.福留広大：ローゼンバーグ自尊感情尺度 2 側面に関する研究：「肯定的自己像の
受容」と自己愛, **Well-being** との関係. 広島大学大学院教育学研究科紀要.
66:151-157, 2017
- 18.Rosenberg, M.: *Society and the adolescent self-image*.
Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1965,
pp17-18
- 19.山本眞理子・松井豊・山成由紀子：認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学
研究. 30:64-68, 1982
- 20.柳井晴夫・岩坪秀一：複雑さに挑む科学. 講談社, 東京, 2007, 40 刷, 38p
- 21.日本学術会議社会学委員会 Web 調査の課題に関する検討分科会 (2020-07-
10) ; 提言 Web 調査の有効な学術的活用を目指して.
[https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-
3.pdf](https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-3.pdf) (参照 2022-10-22)

表 1 各下位尺度の統計量（項目数， α 係数，範囲，平均値，標準偏差）

		項目数	α 係数	範囲	平均 (SD)
自立・自律性	I 独自性	6	.782	19	12.06 (2.84)
	II 将来展望	4	.775	13	10.23 (2.63)
	III 甘え	5	.762	16	12.28 (2.94)
	IV 影響受けやすさ	4	.799	13	10.85 (2.40)
	V 過剰な頑張り	3	.637	10	6.95 (1.83)
	VI 感情統制	4	.628	12	9.56 (2.20)
	VII 自立認識	3	.753	10	6.80 (2.02)
対人依存欲求	I 道具的依存欲求	10	.910	40	20.61 (5.53)
	II 情緒的依存欲求	10	.906	40	23.74 (6.04)
自尊感情	I 自己肯定感	5	.859	20	12.08 (3.29)
	II 自己否定感	4	.842	16	10.63 (2.91)

有効ケース数 (N) 1252

表 2 自立・自律性と対人依存欲求・自尊感情の相関

	I	II	III	IV	V	VI	VII	I 道具的依存 欲求	II 情緒的依存 欲求	I 自己肯定感
I 独自性										
II 将来展望	.247**									
III 甘え	.054	-.117**								
IV 影響受けやすさ	-.158**	.004	.377**							
V 過剰な頑張り	.112**	.006	.001	.121**						
VI 感情統制	.189**	.264**	-.254**	-.216**	-.081**					
VII 自立認識	.413**	.507**	-.109**	-.053	.112**	.315**				
I 道具的依存欲求	.243**	-.030	.542**	.308**	-.089**	-.170**	.045			
II 情緒的依存欲求	.129**	.151**	.429**	.366**	-.042	-.130**	.081**	.630**		
I 自己肯定感	.423**	.496**	-.014	-.007	-.025	.326**	.455**	.107**	.202**	
II 自己否定感	.096**	.385**	-.269**	-.237**	-.245**	.333**	.224**	-.240**	-.078**	.556**

*p<.05, **p<.01

表 3 対人依存欲求・自尊感情による自立・自律性の予測

		自立・自律性							
		独自性	将来展望	甘え	影響受けやすさ	過剰な頑張り	感情統制	自立認識	
決定係数		.239 **	.283 **	.330 **	.178 **	.118 **	.170 **	.207 **	
対人依存欲求	道具的依存欲求	.242 **	-.150 **	.400 **		-.218 **	-.090 **		
	情緒的依存欲求	-.134 **	.176 **	.165 **	.349 **		-.117 **		
自尊感情	自己肯定感	.497 **	.398 **			.236 **	.277 **	.455 **	
	自己否定感	-.132 **	.141 **	-.160 **	-.210 **	-.428 **	.148 **		

* p<.05, ** p<.01

決定係数は (R²)、他の係数は各独立変数の標準偏回帰係数